
グレンゼの境界

臨音深霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グレンゼの境界

【Zコード】

Z0075Y

【作者名】

臨音深霧

【あらすじ】

大都市、レゲニアツィオンに5年振りに帰ってきた主人公、エルナ。

「人」と「主」が繰り広げるバトルファンタジー！

焼け野原。どこを見渡しても焼け野原。そんな中、少女は一人、ふらふらと歩いていた。

この焼け野原の中、不思議な事に彼女は無傷であった。
しかし、細い手足には力が残っていないらしくやがて、地面に崩れるように倒れ込んだ。

(いけない…私がここで死んではいけない…)

彼女は自分に言い聞かせるように頭の中で繰り返しながら残った力で起き上がり跪く。

瞳を閉じ、顔を上に向け、誰もいない蒼空に叫んだ。

「主よ！私はこの悲惨な戦いに終止符を打ちました！」

「… そうですか」

どこからともなく声がした。それはテノールがかつた美声で、例えるならば神のようであった。

「ならば、貴女には名前をあげよ。」

そう、少女には名前がなかつた。

「貴女の名は『グレンゼ』」

「『グレンゼ』…」

「意は…『境界線』。」

「ありがとうござります！」

少女…グレンゼは瞳を開く。

「主、私が主のお田にかかるのことは許されないのでしょうか！」

「そうですね、今の貴女なら…」

グレンゼは虚空へと消える。

「境ちやーん！」

* * *

甲高い声が背後から聞こえた。

「憂！　久しぶり！」

5年振りに会った友人は少し大人びていた。

「相変わらず綺麗な顔してるねーー！」

「憂は相変わらず可愛いね。」

二人はそんな会話をしながら都市の中心部にあるスレシティアンテ大聖堂に向かった。

都市レゲニアツイオン。レゲニアツイオンは一度、壊滅した。まあなぎり前の話なのだが。この戦いをレゲニの惨劇と言つ。

それからはスレシティアンテ大聖堂に入り口がある『ウラトシ』で『都市再生計画』が行われていた。

しかし、都市再生計画が終盤を迎えるとウラトシはZenRegという反政府組織により侵略されてしまつ。

先程境ちゃんさみだれゅうと呼ばれていた少女、宇境エルナや憂と呼ばれていた五月雨憂さつきよ ゆうもZenRegの一員なのだ。

「5年間ブハイヒに行つてたんでしょう？どうしてあんな田舎に行つたの？」

「私の生まれがブハイヒなのよ。」

「へえー！　そうだったの！　ここ5年で汽車の編成が色々変わったからレゲニに来るまで3日くらいかかつたんじゃない？」

「いいえ、半日で済んだわ。届け屋の知り合いがポスタルスタッフまで届け物するから一緒に行かないかって。そこからなら終着駅がレゲニの汽車がでてるからついでに戻ろうかと思って。」

「じゃあまたレゲニに住むの？」

「そういう事ね。ついでにZenRegゼンレックにも復帰することになったわ。」

「ほんとーやつたー！　また境ちゃんとキャッキャウフフ「しなくて

いいわ」

辺りを見回してみる。5年前と差ほど変わらぬ街並み。都会の冷たさがありつつも賑わう人々に親近感を感じる。

なんて素晴らしいのだろう！レゲーは少しづつ、緩やかにその次の通り『再生』しつつあった。

大

「そろそろかもしれないねえ……時。時が満ちるかもねえ……近いうちに。」

男は口元だけで微笑する

相変わらず気持ち悪い川力川何とかできなしのその口調吐き
そうだわだからDIO内でもモテないのよブギヤー m9いつぺん死ん

「そういう君もす”い喋り方するよねえ…ネイザ。君はロボットなのかねえ…ネイザ。ま、そんな君の全てを愛しているんだけどねえ…好きだ。」

「ダルカレ、そろそろやめよ」。

人が驚いて振り向くと長身の男が立っていた。

「和久貴方いつぞよからどうやつて入つてきたの氣づかなかつたわ」「ダルカルが時が満ちるとか言つてたときにその扉から普通に入つてきただけだが。」

「流石、忍者大国出身だけの」ことはあるねえ……感心

「で、君が居るつて事は麻依ちゃんも居るんだよねえ……絶対！」

「あー、たゞあそなのはー。」

「麻依はいつ何時も兄者の傍にいるのです！」

和久の腰に後ろから抱きつく。

ネイザは麻依に鋭い目を向けた。

「ネイザ姫こわーい」

「何でなのかねえ…不満」

今度はダルカルが和久に鋭い目を向けた。

「何で君みたいな影薄男かげうすおとこがモテてこの僕がモテないんだろうねえ…不公平。」

「まあ皆落ちつけって。」

和久がその場をなだめる。

「ところで、ダルカルの言つてた『時が満ちる』って何のことだ?」

「おーっと…………忘れるところだった。」

ダルカル…ダルカル…「ースはいきなり人が変わったように喋りだした。

「ネイザニア」フレイ、河内和久、河内麻依。時は満ちようとしている…」

「その喋りは…『主』か?」

「左様。君たちを呼びだしたのも私だ。」

「で?満ちるとは?」

「グレンゼ…グレンゼが復活しつつある。」

「グレンゼ…ですって!?

3人は息をのんだ。

* * *

「グレンゼが…」

「そうなのです。地上に墮りよつとしているのです。」

一方のエルナに身を借りた『主』もグレンゼの復活を告げていた。

この世界には稀に神…と言うよりは神に近い存在、『主』を自分の身に取り込み声を聞いたり力を借りたりできる者がいる。

そんな者達を人々は『エンゲル』と呼んでいた。ダルカルもエルナもエンゲルである。

主の姿は取り込んだ者さえも見ることができず、主に認められた者しか見ることはできない。

主に認められた者は主と同等の『神に近い存在』になれるらしいのだが、そんな者は未だに一人…グレンゼくらいしかいない。

「グレンゼは今も彼女の境界の中で静かに復活の時を待ち続けています。彼女が人間に取り込まれればその人間はキヤパシティオーバーで逆に彼女に取り込まれ、彼女は段々と力を増していくでしょう…」

「グレンゼの力ってそんなに強大なの？」

「はい…なんせ主を取り込んだうえに自分も主になれる程の力を持つているんですから…」

「つまり、主の力2倍って事ねー」

「いいえ、確証はありませんが彼女はもしかしたらもう一人、主を取り込んでいる可能性があります。」

「げつ…つまり3倍…」

「ええ。それくらいの力が無くては境界など造れませんから。」

グレンゼは異次元に『境界』という自分の世界を持っていた。彼女はレゲニの惨劇が終戦した直後、境界を作り、そこに住んだ。

異次元の境界であるため、歳はとらないらしい。

「…グレンゼの力を欲している者が話を盗み聞きしているかもしきません。話の続きはスレシティアンテ大聖堂に戻つてからの方がよいでしょう。」

主からエルナに戻ると二人は急ぎ足で大聖堂へ向かった。大聖堂の前まで来ると、小さな女の子がエルナを見つけ、顔を明るくさせた。

「エル姉！」

「あ、ムーちゃん！」

ムーちゃんと呼ばれた少女はとてとて走つてくるとエルナの前に姿勢正しく立つた。

「ムーちゃんおつきくなったねー！今年で何歳になつたんだっけー？」

「9歳になつた！」

ムー＝フィオネはZenR^{ゼンレ}eの最年少メンバーで、エンゲルやグレンゼの研究チームに4歳から所属している。

「あ、そういうえば憂姉、セグ兄に呼ばれてたよー！」

「はーい、じゃあ高速ウラトシに入らなきや。」

大聖堂の重い扉を開けると、一人のシスターが出迎えてくれた。

「ウラIDとウラPASSの1J^{1J}显示をお願いします。」

「ID、ANURE。PASS、The Blue God witten Gerechtigkeit【青き神に正義を求む】。

「ID、RAIN-5。PASS、Alles was regun und nassen【全てを濡らす雨となる】。」

「ID、MU.F.PASS、Hoch bin fur die Welt【私は世界の為に】。」

「確認がとれました、ウラトシへ行つてらつしゃいませ。」

シスター達が口をそろえて言つと田の前に光の扉が現れ、開いた。

「5年振りかー」

エルナは扉に足を踏み入れた。

「主…」

少女は隣に座る主の腰に手を回す。

「主…レゲニは再生しつつあります…少しづつ、緩やかに…。」

「そうですね」

「主は少女の頭をなでる。」

「私…レゲニを惨劇が起きる前のレゲニに戻したいの…だから…地上に墮りて革命を起こすわ。」

「君の好きにすればいい…グレンゼ。」

グレンゼは薄く笑う。

「」

ウラトシは5年前と変わらず、Zen Regの者達が慌ただしそうに働いていた。

「おー、あれ、エルナじゃね？」

「エルちゃんだね。」

「境ちゃんだあー！」

「おー！杯ブラザーズじゃないの！」

背の高い方から杯黒徒さかずきくと、杯灰徒さかずきはいと、杯白徒さかずきはくと三つ子である。

「皆元気そうでよかつたー！黒徒の中の主さんはどう？」

「ああ……」

「……グレンゼの事聞いたのね。」

「お前も聞いたのか……。」

一瞬にして空気が重くなる。

「憂姉！そろそろ行かないと、セグ兄待ちくたびれちゃうよー。」

ムーは空気を変えるため話を切り替えた。

「あ、そうだった！ムーちゃん、セグのところに案内してくれる？」

「はーい！」

「……場所を移そうか、ここじゃ何だしね。」

四人はエルナの荷物をフロントで受け取つてから今日からエルナの住む部屋へ向かった。

* * *

「おー……5年振り……」

私がいない間誰も使つていなかつたらしい。置いていったベッドや机、本棚の位置は変わつておらず、懐かしく感じた。

「誰も使わなかつたのね。」

「エルナが戻つてくるかもしれないからつて管理チームが誰も住ませなかつたんだ。」

「そう……」

「それに、境ちゃんは世界に何十人しかいないエンゲルだしねー」「あ…」

エンゲルと言うだけで別格視される。エルナはそれが嫌だった。
（私は只、主の声が聞けるだけで他の子と何一つ変わりないのに…）
神は不公平だ。

「神は何故、主を作り出したのだろうね。主は何故、人間の味方をするのだろうね。人間は何故、主を取り込んだ者をエンゲルと呼び崇めるのだろうね。私は何故…エンゲルに選ばれたのだろうね。」

エルナの本音だった。

「灰徒、白徒、部屋に戻つてくれないか。」

「黒徒兄さん…」

「いいから。」

二人は渋々部屋を出て行つた。

「…ありがとう…黒徒」

灰徒と白徒は気づかなかつたようだが黒徒は気づいていた。エルナが泣いているのを。黒徒達を心配させないように、静かに泣いているのを。

「俺だつて思うさ。なんで俺がエンゲルなのかつて。でもしあうがないじゃないか。神^が主^{を作り出し}、主^が人間の味方をし、人々がエンゲルと呼んだのだから…！」

「…だから、誰かがやらなきゃいけないんだよね…」

「…」

それ以上言葉を見つけられなかつた。

「こんな事してる場合ぢやないや…まずはグレンゼを…グレンゼを

…」

エルナは言葉を詰まらせた。

「グレンゼを…どうすればいいの？」

「どうすれば…倒せば…！…！」

黒徒も気付いたようで言葉を詰まらせた。

エンゲル達は、グレンゼが復活すると聞いただけで、『何のために』

グレンゼが復活するのかは知らなかつたのだ。

「グレンゼはレゲニの惨劇を終わらせた英雄でしょ？…じゃあ、レゲニやこの世界に害を及ぼすことなんてする理由が無いじゃない！」正論だつた。

「…主に詳しく述べた方がよさそうだな…」

「その心配はないよー！」

ガチャッと扉を開ける音が聞こえたかと思つとそこにはムーと憂とセグ＝ロイがいた。

「やあ、エルナちゃん、久しぶり。」

「セグロイ！久しぶり！」

「ははつエルナちゃんは相変わらず僕のことを見つめているんだね。」

軽く挨拶を交わすと憂が話を切りだした。

「戦闘チームのあなた達にお仕事よ。」

ZenReは研究チーム、整備チーム、戦闘チーム、護衛チーム、管理チーム、医療チームの6つに分かれてそれぞれの仕事をこなしている。

「研究チームの観察班から報告があつたの。レゲニの外れにあるベツクアリルでブラックホールみたいなものを見つけたつて。」

「ブラックホール？」

「みたいなものよ。調査によると中は別の世界へつながつてゐたみたい。」

「入つたら帰つて来れなくなるとかは？」

「それもないみたい。」

「ただの出入り口つてことか。」

「そういうことね。」

「それでねーエル姉達にはそのブラックホールみたいな出入り口の先はどうなつてるかを調べてもらいたいのー！」

「出現したのが丁度世界中のエンゲル達にグレンゼの復活を告げられたときと同じなの。だから、グレンゼの件と何かリンクしている

のかもしないわ。」

「そう…で、誰が行くの？」

「エルナちゃん、黒徒くん、灰徒くん、白徒くんの4人で行つても

「うらづ。」

「わ…私たち！？」

「な…なんで俺らが…」

「管理チームが決めちゃつたことだからしじょうがないよー。それに
境ちゃん達なら大丈夫だつて！」

「えー…」

「決行は明日の午後2時。それまではゆっくり休んでちょうだい。
境ちゃんだつて帰つてきたばかりで疲れてるでしょう？」

「うん…ありがとう。」

「ほりほり、みんな部屋から出よつづ。じゃあまた明日ねー。」

「うん、また明日。」

憂はほらほらーとみんなを促して部屋から追い出すと最後にエルナ
に手を振つて部屋を出でいった。

（久しぶりの任務ねー…）

時刻はもう8時を越えていた。

皆さんははじめまして。臨音深霧と申します。

こちらに小説を投稿させてもらつのは初めてになります（ドキドキ

キー「ワード」、「恋愛」とか「戦闘」と書いておきながら
まだ全然出てきません）めんなんやこ……

この「グレンゼの境界」は臨音に珍しく世界観が外国だつたり
。。。先生を頼りにしながら少しどイツ語を組み込んでみた
り。

色々不備があつたりするかもしだれませんがこれから宜しくお願ひい
たします！

【ドイツ語：日本語】

グレンゼ：境界線

スレシティアンテ：裏都市

レゲニアツィオン：再生

エンゲル：天の使い

ブハイヒ：野原

ポスタルスタッズ：郵便街

ベックアリル：路地裏

(「ここはどこ?」)

(分からぬ)

(あの女の子は誰?)

(あれは私ね。)

(宇境エルナ)

(すいぶん小さいね)

(幼いときだね)

(9歳くらいの時かしら)

(あの子はここで何をしているの?)

(わたしはここに…)

迷い込んだの。

「ここはどこ…」

どこかで見たことある街並み。私の住んでる街に似ているけど何か違う。そうだわ…歴史の本で見たことがある、100年以上前のレゲニアツイオンだわ!

少女ははしゃいだ。

本でしか見たこと無い世界が目の前に広がっている…すごい!

でも違和感が一つ。賑やかなレゲニの街なのに、人が居ない。

「…帰りたい…」

「どうしたのかしら、お嬢ちゃん」

後ろから綺麗な女人が声をかけてきた。

「おうちに帰りたいの。この世界に私のお家はないから。」

女は一瞬驚いて目を丸くさせたがまたにつこり笑つて

「そうなの…じゃあ元の世界へ帰らなきやね。名前は?」

「宇境エルナ!」

「エルナ…!?」

「私の名前…おかしかつた?」

「いいえ、違うの。ごめんなさい。さあ、貴女は帰らなきや。エルナ。あそこのお家の扉を開けば元の世界へ戻れるわ。」

「ありがとう!お姉さん!」

私は振り向かずに扉を開けた。…お姉さんの名前も聞かずに。

「ふわあ…またか」

幼いとき、100年以上前のレゲニに行つたときの夢。100年以上前のレゲニは今でも鮮明に思い出せる。それ程印象的なものだつたのだ。

それにあの日の夜だつた。エルナの前に主^{あぶじ}が現れたのは。（貴女は世界を守らなくてはいけない、だから私は貴女のことを守ります。さあ、私の名を唱えるのです。）と名も知らぬ声に言われたのだった。でもエルナは知つていた。見たことも、聞いたこともない筈の彼女の名前を。

「G?t?t?in【青の女神】…」

あの日からエルナはエンゲルになつたのだ。

「さて。支度支度つと。」

ZenRegoのメンバー全員に配給される田^たい布地のコート（改良可）に腕を通す。

（ちょっとちつちやいかな。ま、5年振りだしね。後でサイズはかつてもう一回作り直してもらお）

とりあえずもう片方の袖にも腕を通す。

「エルナ、エルナ、」

実体のない主^{あるじ}が自分に呼びかけてきた。

「なんでしょうか?」

「今日のことなのですが…」

「?」

「少し、嫌な予感がします……」

「どんな？」

「DUも動き始めているようです……」

「ダルカルのお告げでか……」

「はい……」

主^{あるじ}は微弱ながらもネットワークのようなもので繋がっており、主^{あるじ}同士で情報交換などできる。それに多少なら相手の場所、行動、思考などが分かる。

「ベックアリルのことも既に知っているようです。」

「ふーん、やっぱ情報源は河内の人かしら?」

「そのようです。」

「あの子達どこで情報買つてんのかしら」

「エルナがレゲーに戻ってきたという情報も買つてるみたいです……」

「そんな情報まで……といつか要らないよねそんな情報。」

「エルナはエンゲルのうえ、ZenRegの大重要な戦力ですからね

……

「そうかなあ?」

そんなこんなを言つていてるうちに支度が終わつたエルナは部屋を出て食堂に向かつた。

「おはようございます。」

食堂の入り口に立つているシスター達が挨拶をしてきた。エルナはペコリと頭を下げる。

ZenRegの護衛チームは9割がシスターで構成されているのでウラトシ内にはかなりの人数のシスターがいた。

「あら、エルナちゃん久しぶり!」

「アルタさん!」

「エルナちゃんはいつものアレでOK?」

「はい!」

管理チーム所属で料理長のアルタ。エルナのお姉さんの存在でエルナがZenReg^{ゼンレグ}はいった頃からお世話になつていてる。

「境ちやーん！」

声のする方を見ると憂とムーとセグが朝食をとりにこむといひだつた。

「はいどーぞーーー！」

「ありがとう！」

料理を受け取ると3人のところへ行つた。

「おはよう、エルナちゃん。」

「おはよー！」

「おはよー！」

「三人ともおはよう。」

「朝食をとりながらで悪いんだが今日のことを少しお話しして少し。」

「あ、うん。」

「の中には4次元らしくなつてゐるみたいだ。」

「だから、どんな世界にとばされてもおかしくないの。」

「例えば、過去や未来、パラレルワールドとかね。」

「あ…おつ…じゃあどうすれば…」

「大丈夫！ちやーんと策はどうあるよーはいー！」

ムーがエルナに向かつて何か投げてきたのでエルナはあわててキャラチした。

「…チョーカー？」

「ご名答！エル姉にはソレをつけて飛び込んでもらいまふ！」

「ムーちゃん…口に食べ物詰め込みながらしゃべらないの…」

「ふみまくん（すみません）…つと。で、そのチョーカーにはありとあらゆるものをはかる機能が付いてて、そのチョーカーから送られてきたデータを私が分析しながらエル姉たちを時に流されないように指示します！」

「は…はあ…」

「もう…私を誰だと思つてゐのーー！」

「神の頭脳だーーーだろ？」

「お、灰徒おはよう。」

「おはよう、今日の打ち合わせ?」

「そんなとこー!」

「はい、灰徒くんもこれ。」

「チヨーカー? 付けて行けばいいんすか?」「安全保障のためにな。」

「了解つす!」

「黒徒と白徒にも渡しておいてー」

「へーい。」

「じゃ、私たち研究チームはお先に。」

「もうちょっととゆっくりしてけば?」

「いいんだ、今日の任務の最終確認があるから

「そつかー: 頑張つて!」

「エル姉もねー!」

「お、ちょうど3席あいたから兄さんと白徒でも呼んでくるかね

「おーいいね! 私待ってるわー!」

久し振りに味わう任務前のテンション。

* * *

「ははあーん。これが噂のブラックホール風出入り口がー」

「とりあえずダルカルとネイザが来るまで待つて「ダイブイン」ウ
ブラックホール風出入り口ー!」

「麻依! 待て!」

河内兄妹はブラックホール風出入り口にダイブした。

* * *

「やつぱりねえ… 予想通り。」

「何が予想通りなのよ」

「ブラックホール風出入り口に飛び込んでいったねえ… 麻依ちゃん。」

「とこ、うるせえやがおやかおやかおやか」

「和久も飛び込んでいいつたねえ……後から。」

「今すぐ和久じやないわ二人を連れ戻しに行く、ダルカルも来なさい」

「今、和久だけって言おうとしたよねえ……まあいい。あと30分待つて、やねえ」
さつま。

「なんでもないがね……三〇分

「僕らが今動けば最悪の未来が待つてゐるからねえ……待とう。」

三

弾丸

弾丸のよ／なしやへり方をするネイサが珍しく黙った
あいじ

ダルカルの主、Prognose【未来予知】。

彼は0・1秒以上先の未来なら全てを知ることができる。

しかし体力の消耗が激しかったため必要以上には能力を使わない

大
大
大

「兄者！兄者！なにここす”い！異世界！？」

「いや、100年以前のレギーだな。」

「レギー! レギーなの! ジー! ジー! ジー!

麻依ははしゃいていた。

(やべえな…)

和久は事前にタルカルから聞いていた。

麻依がここに飛び込むことも飛び込んだ先が歪んだ危ない世界だと
うつこと。

麻依はどの未来を選んでも別世界へ飛ばされないが和久は下手に動

くと別世界へ飛ばされると言われた。

(ここで待機か。)

*
*
*

『これより任務を開始します。そつちの準備はいい?』

首もとのチョーカーから憂の声が聞こえてくる。

「OK。四人ともばっちりよ。」

『よし、飛び込め!』

四人は勢いよくとびこんだ。

「…?」

「あれ…これうまく飛び始めたのか?」

「もしかして異世界飛ばされた?」

「いや…違う…」

エルナは眉をひそめた。

「ここ、100年以上前のレゲニだわ。」

「マジかよ!」

「すげー」

「境ちゃん物知りだねー」

「ちがう…の…それだけじゃ…ない…」

「エルナ?」

「わたしはここに…来たことがあるの…」

「!?

「確かに私はこの通りで…」

「どうしたの、お嬢さん」

四人は声のする方に顔を向けた。

はじめまして。1話を読んでいただいた方はお久しぶりです。
深霧ねみゆと申します。

2度目の投稿ですがやはり緊張します（ドキドキ
いつになつたらこの緊張になれるのだろ？…

なんだかやつと始まつてきたって感じですね！
書いていてすぐ楽しいです^ ^

色々不備があつたりするかもしだれませんがこれからも宜しくお願ひ
いたします！

【ドイツ語：日本語】

Götterin：女神
Prognose：予知
Schatten：影

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0075y/>

グレンゼの境界

2011年11月21日09時40分発行